

『四海茫々』

⑦ 生まれは辰馬家

神戸に移り住んでからの習慣だが、この季節になると必ず出掛けるところがある。夙川(兵庫県西宮市)だ。

六甲山地の“ごろごろ岳”から西宮市を南流し大阪湾に注ぐ全長7kmほどの短い河川が夙川。阪急神戸線と同甲陽線の夙川駅からすぐのところに浅い川の流れと石積み護岸、松と桜の並木が続いている。桜並木はおよそ3kmに及び、咲き始めると昼も夜も人出が絶えない。この夙川沿いの桜並木は辰馬外一郎氏が西宮市長(1946～59年)の時代に提唱し整備された。と、何やら熟知り顔に説明しているが、これは田村茂氏から聞いた話の受け売りである。

田村さんは1939年(昭和14年)生まれ。62年(昭和37年)新日本汽船に入社、山下新日本汽船、ナビックスライン、ナビックス近海、商船三井近海、商船三井内航、乾汽船などに所属し、2010年(平成22年)財団法人『山縣記念財団』の理事長に就任した。氏は、同財団で230ページの冊子『海、船、そして海運—わが国の海運とともに歩んだ山縣記念財団の70年』を著し、それが12年9月に発行されると、まるで役目を果たしたように翌13年3月あっさりとして逝ってしまった。波乱万丈の市況裡を生き抜いた人物だが、温厚篤実の人柄で歴戦の雄らしい様子は少しも見せなかった。不定期船の世界では実務と歴史に通じた第一人者、博覧強記の人としても多くの人に記憶されている。

本欄は86回から前96回まで三井船舶が演じた“三井ファイト”と大阪商船三井船舶の発足当時について書き綴ったが、ひとまず筆をおき、商船三井をめぐる物語は稿を改め

掲載する。今回からは山縣記念財団にまつわる話を紐解いていきたい。

さて、夙川の桜並木を造った辰馬外一郎氏だが、この人は山縣記念財団の創設者、山縣勝見氏の実兄。これまた田村さんの話の受け売りである。以下もそうだ。

山縣勝見氏は1902年(明治35年)、灘西宮の酒造家、辰馬家に生まれた。辰馬本家とは異なる系統、本町辰馬が勝見氏の実家である。ちなみに辰馬本家はあの清酒『白鹿』の醸造元であり、明治時代は造石高で圧倒的な全国トップであった。本町辰馬も『東自慢』を主力銘柄として醸造を手がけていた。

勝見氏が辰馬姓から山縣姓になったのは辰馬本家の当主から頼まれたからである。本家当主は兄の外一郎氏に「勝見君を私にくれ」と頼んだ。これは、後継者がいない東京の本店(酒問屋)の姓を継がせるためであった。勝見氏は神戸一中、三高、東大と進み、卒業後は辰馬本家が営む辰馬海上に入社した。また、辰馬汽船とその後身海運会社、新日本汽船の社長を務め、辰馬海上火災保険とその後身、興亜火災海上保険の社長なども歴任した。さらには日本船主協会会長、参議院議員などを務め、吉田内閣(第4次)時代は厚生大臣としても活躍した。

生きる舞台が途方もなく大きい人であった。なぜ、この人物にスポットを当てるかというと、それは戦後日本海運の大恩人であるからというほかない。

さきに紹介した三井船舶の熊野修一氏は、三井ファイトを通じ国際社会に日本海運の雄叫びを響かせた。勝見氏の場合は、三井ファイトに遡ること2年、51年(昭和26年)のサンフランシスコ講和条約調印時に日本海運自立の礎を築くと



山縣勝見氏

いう功績があった。多くの日本人は、戦後すぐの日本が独立国でなかったことを忘れている。独立は、サンフランシスコ条約への調印により手にした。

勝見氏は戦後の50年(昭和25年)、日本船主協会の会長に選任され、船舶民営還元を実現する。この頃、海運問題のほとんどが政治問題であり、船主協会の会長としてこれらの仕事を遂行していくには国会に議席を持つ必要があると考えた。そこで50年6月の参議院選挙に兵庫地方区から立候補し定員6人中2位で当選、参議院議員となった。48歳だった。

同年勃発の朝鮮戦争により自由諸国陣営の対日感情は大きく好転し対日講和条約締結の機運も高まっていた。しかし、英米の海運界は日本に対する警戒感を緩めず、日本海運に対して制限条項を設けるべきだと強く主張していた。折から米国のマグナソン上院議員が来日することになった。同議員は米国の海運政策に関わる最高実力者で上院の海運委員会委員長を務めていた。来日は講和条約に関連して日本海運の実情を調査するためだった。この大立者の来日に先立って勝見氏の驚異的な行動が始まる。氏はワシントン大学でマグナソン氏の学友だった日本人が東京に存在することをまず探り当てた。

(瓜生隆幸)